

1. 1 汽水域

(1) 干潟の保全、復元、創出

現状の課題

淀川大堰下流の汽水域区間は新淀川と呼ばれ、洪水時の放水路として明治時代に開削された川である。河口部では干潟の作用等によって干潟が形成され、その干潟によって、生物の多様性が保たれ、また、水質の浄化作用として役立っている。

昭和20年代では干潟の面積は約180ha存在していたが、地盤沈下や河川改修の影響で、平成10年には約50haに減少した。

S23 航空写真（汽水域0k～10k）



S46 航空写真（汽水域0k～10k）



H9 航空写真（汽水域0k～10k）



図 1-1 航空写真にみる干潟の減少

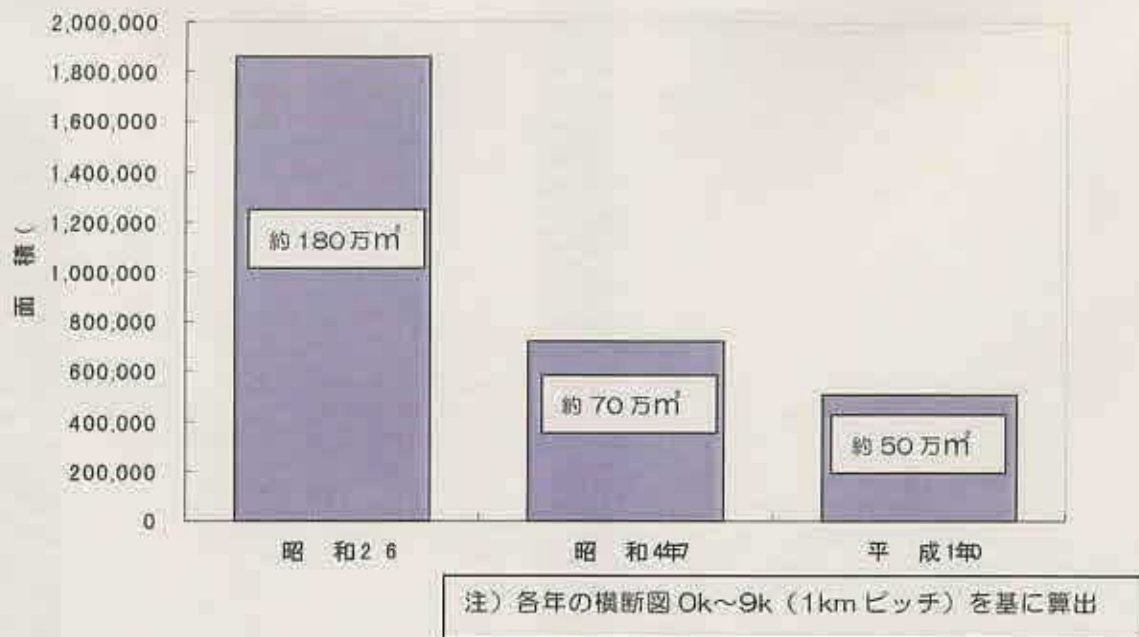


図 1-2 淀川汽水域の干潟面積の減少

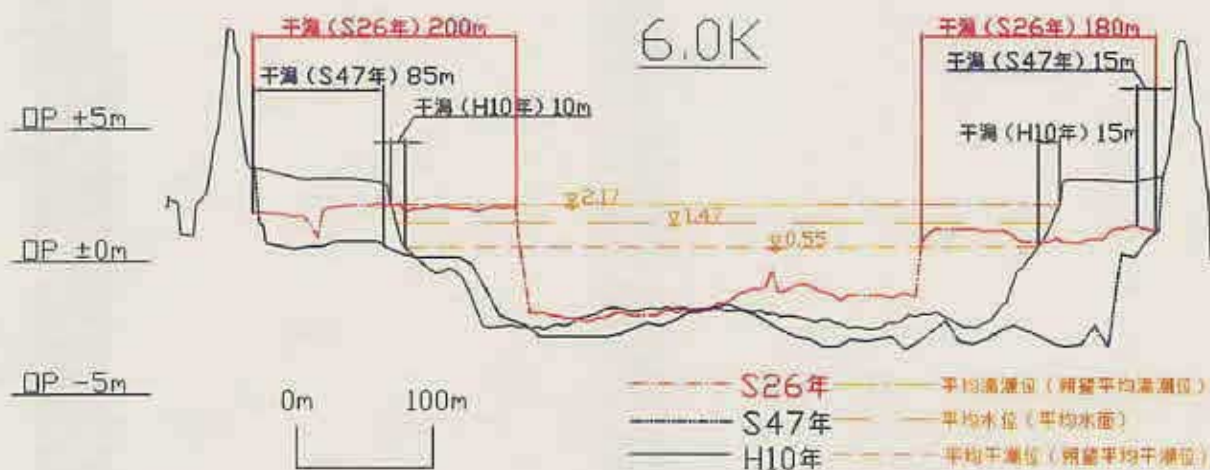


図 1-3 横断経年変化図 (距離標 6k)

(2) 水域から陸域への水辺環境の連続性の確保

現状の課題

高水敷が造成され、護岸で水域と陸域が分断された状態となっている。

河川の「高水敷」と「低水路」という単純な形状は河川生態的には不自然であり、水域から陸域までの水辺環境の連続した断面形状を目指す必要がある。

水域から陸域への移行区間である水辺は、一年生植物や湿性植物の生育場、多くの魚類の繁殖場所となっているなど河川の生物にとって重要な場所であり、保全、復元、創出を図る必要がある。

(3) 新淀川への放流量の確保

現状の課題

通常は旧淀川（大川）に放流されており、新淀川への流量は確保されておらず、淡水から海水への移行が一般の河口堰を有する河川以上に不連続となっており、淀川大堰からの放流量が少ないあるいは全くない時期では、塩分の高濃度化とその停滞、さらに、夏季においては底層の貧酸素化という問題も生じている。

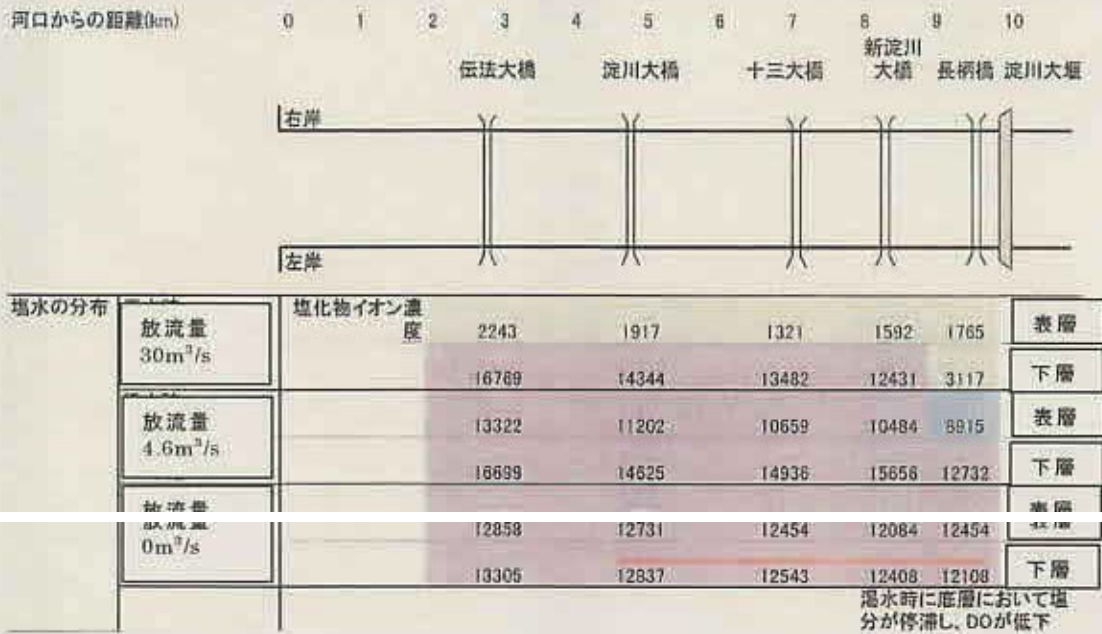
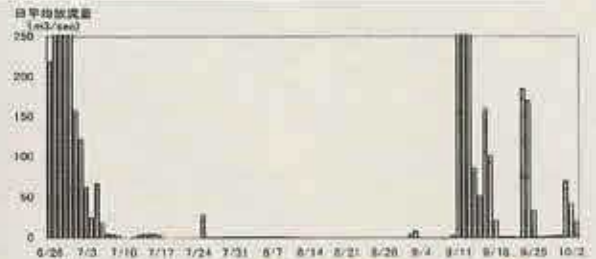


図 1-7 淀川大堰放流量と塩化物イオン濃度

REDEKE system による感潮域の区分
(Riemann und Schlegel 1971に基づく)

水質	(mg/l) × 3
淡水	< 200
貧鹹性汽水	200 ~ 1100
α-中鹹性汽水	1100 ~ 5500
β-中鹹性汽水	5500 ~ 8900
多鹹性汽水	8900 ~ 17000
海水	> 17000

ヤマトシジミ生息環境からみた場合、後期幼生期（6～9月）で、塩分濃度の適正範囲として、1000mg/l 未満（ただし、淡水ではほとんど死亡）参考目安が示されている。



夏季濁水時に底層のDOが低下

出典：新淀川水環境計画検討業務報告書